

先週9月1日は2学期の始業式でした。同時に「防災の日」でもありました。それにちなんで避難訓練を計画しましたが、悪天候だったため延期し、本日の実施となりました。

大正12年(1923年)9月1日、関東地方を中心に、マグニチュード7.9の大地震が襲いました。建物が倒れ、山が崩れ、崖が崩れ、沿岸部に津波が押し寄せ…。お昼の時間帯だったことから火災も起きました。東京では3日3晩燃え続け、面積の80%が焼き尽くされたそうです。死者・行方不明者が14万人にもものぼる空前の大惨事。これが「関東大震災」です。今から99年前のことです。

そして、平成23年(2011年)3月11日(金)午後2時46分、三陸沖を震源とする国内観測史上最大マグニチュード9.0の地震が発生しました。最大震度7、岩手県、宮城県、福島県、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、8県で震度6以上を観測しました。その直後、地震にともなって発生した津波が、北海道から関東の太平洋沿岸へ押し寄せ、船や港、建物、田んぼ、畑まで呑み込みました。津波の高さは、福島県相馬市では9.3メートル以上、宮城県石巻市では8.6メートル以上、岩手県宮古市では8.5メートルを観測しました。

それだけではありません。地震の揺れと津波により、東京電力福島第一原子力発電所から放射性物質が広範囲に漏れ出しました。原子力緊急事態宣言が発令されるという史上例を見ない、未曾有の大災害となりました。これが「東日本大震災」です。

原発から漏れ出した放射性物質から日本を救うために、福島原発の最前線で戦った人たちがいます。一つの例を紹介します。「東京消防庁ハイパーレスキュー隊」です。

東京消防庁ハイパーレスキュー隊に、福島第一原発への派遣要請がかかりました。出動する隊員の中には小さな子供がいて、奥様が妊娠していた方もいたそうです。出動が決まった時、メールで奥様に伝えたら、「日本の救世主になってね…。」という返信が来たそうです。

18日午前3時、東京消防庁から特殊災害対策車を含んだ30隊139名が出動しました。ハイパーレスキュー隊は、巨大な放水能力をもつ「スーパーポンパー」とよばれる消防車で連続放水を開始。この連続放水は約14時間続いたそうです。総放水トン数は約2,430トン。想像もつきません。

人間は、100ミリシーベルト以上の放射線を浴びるとガンでの死亡率が上がるそうです。出動する時、すでに福島原発付近では400ミリシーベルトありました。さらに、一日ごとに100ミリシーベルト上がっていったそうです。この任務は、まさに命をかけた史上最も危険な任務でした。こんな極限の状況は映画やドラマの世界でしかないと思っていました。でも事実です。日本を救うために、自分の命を投げ出した人たちがいました。このことを知ってください。

任務を終えた後、ハイパーレスキュー隊のリーダーが強く言っていたことがあります。それは、“人と人との絆があれば、どんな困難だって乗り越えられる”という言葉です。

福島原発だけではなく。震災から復興するために、全国から10万人以上の援助隊が集まり、197か国から支援の申し入れがあったそうです。

人が人を助けたいと思う気持ち、同じ人間としての絆があるからこそ、私たちは困難を乗り越えていけるのだと思います。私たちの生活は、“助け合い”という絆で成り立っています。コロナ禍にある今、こういった教訓を生かさなければならぬと思います。

東日本大震災のような震災は二度と起きてはなりません。でも、大地震はいつ襲ってくるかわかりません。今日はそれに備えての避難訓練でした。練習ではありません。命を守る訓練です。

この後、教室にいる先生から、東日本大震災の時にどんな体験をしたのか、そんな話も聞きながら振り返りをしてみてください。